

● 新東西南北一都道府県眼科医会からのエッセイ

踊る阿呆に見る阿呆  
同じ阿呆なら……

松 本 治 恵

「日本の眼科」86：10号（2015年）別冊

（2015. 10. 20 発行）

公益社団法人 日 本 眼 科 医 会

## ● 新東西南北—都道府県眼科医会からのエッセイ

踊る阿呆に見る阿呆  
同じ阿呆なら……

松本 治 恵

「大地を震わす和太鼓の律動に、甲高く鋭い笛の音が重なり響いていた。熱海湾に面した沿道は白昼の激しい陽射しの名残りを夜気で溶かし、浴衣姿の男女や家族連れの人草履に踏ませながら賑わっている。」

今年の第153回芥川賞受賞作「火花」又吉直樹著の冒頭の一節である。これを目にした瞬間、私の目の前には艶やかな阿波おどりの世界が広がった。もちろん、又吉さんが描いているのは花火大会のことで阿波おどりではない。舞台も熱海で徳島ではない。生まれも育ちも徳島の私には、阿波おどりの華やかな美しさ、浮き立つ音楽、心躍る雰囲気、匂いなどが軀に染み付いており、何でも阿波おどりと感じてしまうようだ。

もちろん、今年の夏も「えらいやっちゃ、えらいやっちゃ、ヨイヨイヨイヨイ、踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損々……」と唄われる軽快なリズムが、いまだ軀に残ったまま、ずっと続いている。

ところで、「『阿波おどり』って、何？ いつ頃から踊っているの？」

阿波おどりは、徳島県(旧・阿波国)を発祥とする盆踊りで、日本三大盆踊りであり、江戸開府より約400年の歴史がある日本の伝統芸能のひとつである。毎年お盆の時期になると県内各地の市町村で開催され、なかでも徳島市阿波おどりは踊り子や観客

数(130万人以上)において国内最大規模であるようだ。

「連」というグループを作り、鳴り物といわれる楽器(三味線、太鼓、鉦鼓、篠笛など)の2拍子の伴奏にのって、踊り手(男踊り、女踊り、子供の踊り)の集団が踊り歩く。掛け声は上述の「えらいやっちゃ、えらいやっちゃ……踊る阿呆に見る阿呆……」の他「ヤットサーヤットサー」というのも多用されている。

江戸時代には、一揆につながるなどの理由で禁止されていた時期もあった。また、戦時中にも一時禁止されたが、終戦翌年(1946年)から再開された。徳島市は空襲によって焼け野原になっていたが、復興へと歩み始めた市民がこぞって参加した。振り付けは人それぞれ、自由な踊りを競い合った。戦後の苦しみ、鬱憤をすべて阿波おどりにぶつけた。その後、高度成長期には企業も「連」を形成し参加するようになり、祭りの規模が拡大した。この頃から、グループで一糸乱れぬ動きを披露するようになる。そして県外からの観光客も年々増加していった。

ところで、「掛け声の『踊る阿呆』とは、一体どんなアホで、どれくらいバカなやつなのか？」ふと、気になった。患者さんで、5歳からはじめ、踊り歴43年の自称「踊る阿呆」に聞いてみた。

阿波おどりととは？

「そりゃあ『見せる芸』『魅せる芸』でしょ。」毎年、阿波おどり本番が始まるまでは、「今年の夏で最後にしよう」と必ず思う。その練習は過酷極まりない。1年のうち10ヵ月は毎週1,2回,2時間以上あり。最初は腰を落として足運びのみ。特に男踊りは壁にラインを引き,腰には紐を結ばれ,その腰紐が壁のラインより常に下になるように,ただひたすら1,2,1,2と2拍子を刻む。太ももが千切れるか,意識が途切れるか,息が切れるか……。足腰が仕上がると,やっと手。二の腕も千切れるか……。その後,立ち位置争いがあり,構成(見せ場作り)を行っていく。もちろん,本番が近づくと練習回数・時間は増え,暑さとの闘い,自分との闘い,そして美しさの競い合いが激しさを増してくる。人知れず夜な夜

な鏡の前で,美しい仕草・魅せ方の研究を行うことにも余念がない。

何故,ここまでやるのか?

「お客さんの喜ぶ笑顔が見たいから。」笑顔さえ見られたら本望,後はどうだって良い。過去の過酷な練習も,現在直面している苦痛も吹っ飛んだ。気分が高揚し,成し遂げた後の達成感もあり幸福感が最高潮に達する。昨年「今年こそ最後」と心に誓った阿波おどりを,今,まだ続けている。これぞ「踊る阿呆」。

何かに似ている。「患者さんの喜ぶ笑顔が見たいから」眼科医という過酷な仕事が止められない,休めない,私たち眼科医は……「働く阿呆」?

